

### 【書評】近堂秀『『純粹理性批判』の言語分析 哲学的解釈：カントにおける知の非還元主義』：心の存在と言語の意味

UZAWA, Kazuhiko / 鵜澤, 和彦

---

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

2020-03-30

## 心の存在と言語の意味

鵜 澤 和 彦

本書は、著者が『純粹理性批判』（批判と略記）の周到な読解と言語分析哲学の研究を積み上げてきた力作である。著者は、表題に「言語分析哲学的解釈」とあるように、内在的カント研究ではなく、言語分析哲学の立場から『批判』を解釈することを目指している。読者は、本書を紐解くならば、著者が『批判』を哲学の課題として引き受けていることに気づくであろう。この姿勢は、カントの内在的および歴史的の研究に対しては、その現代的意義を問いかけ、言語分析哲学に対しては『批判』の見直しを迫っている。本書は読者に哲学的内省を促す、きわめて示唆に富んだ作品である。

著者の問いは、以下のようにまとめられる。わたしたちの心は、そもそも存在するのか、また、言語の意味はどの

ようにして成立するのか。著者は、これらの問いの答えを『批判』と現代の言語分析哲学に求めている。著者のねらいは、『批判』の言語分析的解釈によって、以下の三つの論点を明らかにすることである。すなわち(1)外的世界についての知、他人の心についての知、自分の心についての知が、相互に還元不可能である(知の還元不可能性)。(2)ある心的出来事とある物的出来事の同一性(トークン同一説)。(3)言語の意味は、外的状況の中にある(意味の理論の外在主義)。これら三つの論点は、相互に深く連関している。著者は、これらを明らかにするために、カントの『批判』から演繹論と四つの誤謬推論の議論、そして、言語分析哲学からは、デイヴィドソンの三角測量の議論、シェーリッヒの超越論的記号論、ハンナの一般的認知意味論を

論及する。

もつとも、第一部「現代哲学における『純粹理性批判』解釈の問題」と第二部「心の哲学としての超越論的心理学」は、『批判』のテキストに即しているため、内在的なカント研究として読むことも可能である。これに対し、第三部「意味の理論としての超越論的論理学」では、著者はカントを超えて、独自の思索を展開している。第三部は、意味の問題を考える哲学者にとって、多くの示唆を含み、刺激的である。

著者の最も重要なテーゼは、カントの自己意識論と(1)デイヴィドソンの三角測量の議論との間に構造的共通性(p.173)があるという点である。ただし、両者が同一であるとは主張していない。この点を理解するにあたって、著者は、カントの超越論的自我と経験的自我の区別に基づいて、前者を第三者的な観点として、そして、後者を文脈依存的な自我として規定する(p.131)。そして、この後者の自我には、社会的・歴史的な文脈が帰せられる。著者は、これを踏まえて、自己意識と三角測量について以下のように述べている。

「超越論的統一という自己意識における超越論的主観は、言語共同体の中で言語記号を使用する主体とい

う第三者的な観点を含むことになる。——(中略)——  
カントが根拠とする自己意識の在り方は、デイヴィドソンの三角測量の議論における自己知のモデルとして解釈することができる。」(p.170-1. 傍点筆者)

カントの超越論的統覚、言い換えれば「意識一般」は「あらゆる統一を条件づけるが、それ自身は無条件である」(A401)。カントは『批判』第二版で、それを「叡智体」(B85)であるとも述べている。この統覚は、その普遍性から、第三者の視点として特徴づけることができる。さらに、筆者はデイヴィドソンの三角測量の意味について、以下のよう  
にまとめている。

「この二人の話し手と共通世界の間の三方向の関係が三角測量である。思考と言語にとって必要な客観性は、三角測量の議論に従って、二つの生物が共通の遠位的な刺激やその刺激へのそれぞれの反応に対して相互的かつ同時に反応するという事実には依存すると考えられる。」(p.172. 傍点筆者)

ここで登場する二人の話し手は、超越論的な第三者の視点ではなく、文脈依存的な経験的的自我である。そのため、

思考と言語の客観性のために、二人の話し手が相互に話し合う必要が生じる。なぜなら、その場合の思考と言語の意味は、状況に依存するからである。また、デイヴィドソンの状況依存的な意味の理論は、心的なものの還元不可能性を基礎づける。言語の意味がその状況に依存するのであれば、他者の心の内容について普遍的に語ったり、理解したりすることは、もとより不可能である。心的出来事と物的出来事とが同一である（トークン同一説）としても、それはすべての出来事（全称）に関してではなくて、ある出来事（特称）に限定される。著者は、ここから(2)心的なものの還元不可能性を基礎づけている。(3)意味の理論の外在主義によれば、言語の意味は、その都度の社会的・歴史的文脈に依存する。著者は、デイヴィドソンの「単称因果言明」を挙げて、この意味論を説明している。

「太陽がある石を温めた」という現象についての判断が真であるのは、太陽がその石を温めたときまたその時に限る。このようにしてカントは、デイヴィドソンに先駆け、原因性概念に訴えて判断の意味が外的状況の中にあることを主張しているのである。」(p.190)

著者の三つの主要論点について概観してきたが、これら

の論点は、たしかに、カントの問題設定やその方法と同一ではない。たとえば、序論で述べられているが、本書は「ア prioriな総合判断の可能性」そして、現象と物自体の区別には立ち入らない。しかしながら、カントとデイヴィドソンとの間に構造的共通性がある、という指摘には、十分な説得力がある。そして、議論も洞察に富んでいる。カントの理論哲学を外在主義や実在論と解するカント研究者も少なくはない。たとえば、筆者の師匠、ペーター・ロースは、外在主義の立場を取っており、デイヴィドソンの立場に極めて近い。また、その弟子のマルクス・ヴィラシエックもバットナムの実在論を支持している。二人とも分析的なカント研究という点で著者と共通している。

あとがきによれば、本書の内容は、学位論文としての提出時に大幅に加筆・修正され、また、本書の刊行にあってもさらに手を入れたとされている。このため、文章は簡潔で読みやすく、また、内容もよく整理されている。後学の研究者の方々に、本書を読んでもらえることを期待したい。